

## 映像説明資料で示した外来種の概要

### アライグマ

アライグマは北米原産の食肉目に分類される動物である。夜行性であり、森林や湿地帯から市街地まで多様な環境に生育するが、一般的には水に近い場所を好む。2 ヶ月間の妊娠期間を経て、春に 3~4 頭の子を産む。雑食性で動物全般から果実、野菜、穀類までレパートリーは広く、農業被害とともに在来種への影響が危惧される。行動圏は環境によって大きく異なるが、食料調達の容易な都市部では数 ha と狭く、住宅地や隣接する林縁部を積極的に活用している。日本への侵入の原因は飼育個体の逃亡・遺棄と考えられている。定着に際しては人間の生活圏を積極的に活用している。侵入の影響としては農業等被害やアライグマ回虫症といった人間生活への直接的被害の他に、捕食・競合による在来種への影響が危惧される。北海道ではニホンザリガニやエゾサンショウウオの捕食やアオサギの集団営巣放棄といった事態も確認されている。日本には天敵が存在しないことから、今後各地で在来種へ悪影響を及ぼすことが予想される。

### タイワンリス

タイワンリスは和名でクリハラリスといわれる種の 1 亜種である。クリハラリスは、インド西部、中国南部、マレー半島、台湾と分布域が広い。日本には観光地や都市公園に導入され定着した。

原産地である台湾南部は湿潤温暖な気候で、リスの餌となる種子・果実は一年中豊富である。繁殖の季節性は明確なく、年 3 回の繁殖が確認されている。ワシ・タカ類、ヘビ類による捕食圧が高く、個体数密度は 6 頭/ha ほどである。行動圏は互いに重複し、警戒音声によって捕食者の接近を知らせ合うなど、高密度で暮らすことに適応した社会構造を持つ。

冬の寒さが厳しく、餌となる種子や果実が実る季節が短い日本でも行動圏を重複させ高密度で暮らす。また日本では天敵が少ないため、生存率が高い。巣を作る修正があるため、ある程度の耐寒性を持つ。餌が不足する時期には樹皮を嚙り、樹液を舐め、花や葉を食べるため植物への影響は大きい。

### オオクチバス

オオクチバス（通称ブラックバス）は北米原産の淡水魚である。日本へは釣りの対象または食用として 1925 年に神奈川県芦ノ湖に初めて導入され、1970 年代になると分布域が急激に拡大した。本種はきわめて多様な水域に生息しており、2001 年までに全都道府県で生息が確認されている。

本種は典型的な肉食種であり、通常はオイカワ、ヨシノボリ類などの魚類やエビ・ザリガニ類などの甲殻類を主食とし、その他水生昆虫や水面に落下した陸生昆虫や鳥の雛まで捕食する。産卵は春から初夏にかけて行われる。生育環境にもよるが、中部日本での一般的な湖では、満 1 歳で全長 18cm ほど、満 2 歳で 25cm を超えて成魚となる。本種はその肉食性から、導入当初より水産有用種への影響が懸念され、害魚論が展開されていた。近年では生物多様性保全の立場から在来生物群集に対する影響そのものが問題視されるようになりつつある。その一方で本種は釣りの好対象魚であり、バス釣り需要に依存した産業も形成されている。このように本種には「排除」と「利用」という相反する立場が存在する。こうした社会的側面を持つことは他の外来種にはあまり見られない大きな特徴である。